FOX ～翻訳によって挑発される性～

高　橋　久　子

1，問題の所在

Margaret Wild と Ron Brooks のコンビで発表された絵本 *FOX*[1]（Allen & Unwin Pty Ltd.，2000）は、2001 年、『キツネ[2]』として BL 出版から翻訳出版された。『キツネ』は第 7 回日本絵本賞翻訳絵本賞を受賞した。訳者寺岡襄の訳文については、「登場する動物の心模様が伝わるよう、絵を生かすよう意訳していて、友情や信頼感の重さが自然に伝わってくる」（学校図書館速報版，2002,3,15）「ダイナミックな絵の表現と絵を生かした訳文がいい」（学校図書館，2002,4）「友情、孤独がわずかなページで語られている訳文もいい」（学校図書館，2002,5）など、非常に積極的に評価された。しかしながら、『キツネ』における彼の意訳には、ある方向性がみえ、その方向性に関する議論は、いまのところ、見当たらない。しかしながら今回の論考の目的は、その方向性を軸に、ひとりの翻訳者の訳の是非を問うことにはない。その方向性が、読者の中に内在する性への意識を挑発していくということ。そして、その挑発によって、読者が、受動的な読みの場所から、能動的な読みの場所へとひきずりだされていく、ということについて、それを作品のもつ広義の可能性として捉えられるかどうかを考えてみたい。

＜寺岡訳にみられるふたつの方向性について＞

①過剰な訳文……特に前半部分に多く見られる

②カササギの台詞や行動に付与される特徴的な訳文……キツネの登場以降に顕著となる

特に②は、それまでイヌと仲良く暮らしていたカササギが、孤独なキツネの登場によって、次第に心を動かされていく過程の中で、これまでのイヌとの関係は他愛のないものでしかなかったことをアピールするような幼い喋り方や、キツネの誘いに乗るのは自分の積極的な意志ではないことをほのめかすような応対の仕方に、よく表れている。こうした原文を離れた訳が重ねられていくことで読者の性意識は挑発され、原文に強く感じられた「友情と裏切り」という構図から「恋愛のかけひき」の構造を浮上させる。これを訳者のジェンダー意識の問題として考えることもできるが、読者の中に内在するジェンダー意識を掬い上げ、ストーリーの中をかいくぐらせる巧妙な装置とも捉えられるのではないか。

2，寺岡訳の方向性を検討する

先に指摘したとおり、ストーリーの前半部分では、原文のもつストーリー性をもりあげるための過剰な訳文がめだつ。いくつかの部分を具体的にあげてみる。

・まず最初の、やけどを負ったカササギとカササギを救い出したイヌとの対話について

“I will never again be able to fly.” she whispers.（原文）

「わたし、どうせもう、二度と飛ぶことなんてできないわ」となげやりにいった。（寺岡訳）

“I know,” says Dog. He is silent for a morment,（原文）

「そうかもしれない」と、イヌはつぶやいておしだまったが、気をとり直していった。（寺岡訳）

「なげやりに」とか「気をとりなおして」という表現は、カササギとキツネの対話をより大人びたものに印象づける。

・次に、イヌとカササギの穏やかな生活に突然キツネが介入してくるところで、そのキツネの存在を捉えるカササギの描写にも、原文より過剰なものが感じられる。

She can feel Fox staring at her burnt wing.（原文）

やけどした羽をみつめるキツネの目が、なんだかぶきみだったので。（寺岡訳）

Now and again Fox joins in the conversation, but Magpie can feel him watching, always watching her.（原文）

そこへキツネもやってきて、話にわりこもうとするので、カササギはとってもいやだった。

いつもじいっとみつめるようなキツネの目がおそろしくってしかたがなかった。（寺岡訳）

原文と対比してみると、カササギの自意識により重点がおかれて語られているのがわかる。

・訳文の過剰さは、続く次の表現にもみられる。

And at night his smell seems to fill the cave-a smell of rage and envy and lonliness.（原文）

夜になると、ほら穴じゅうに、キツネのふりまくにおいがひろがる。なかよした

ちへのねたみやうらやみ、ひとりぼっちのほこりとかなしみがごちゃまぜになったへんなにおい……（寺岡訳）

ここには、異端者としてのキツネの造形をより鮮明にしようとする意図が感じられる。

・次のカササギとイヌの会話は、原文の意味を離れ、ふたりの中をさこうとするキツネという存在を強調するかのような訳に置き換えられている。
“He belongs nowhere,” she says. “He loves no one.”（原文）
「仲間ぎらいで、なさけをしらない。なのに、やきもちやきなんだから」（寺岡訳）

But Dog says, “He’s all right. Let him be.”（原文）
ところがイヌはこういうばかり。「だいじょうぶだよ。ほっときゃいいさ」（寺岡訳）

本来は「どの集団にも属さないしだれのことも愛さない」という意味だったのが「仲間ぎらい」「なさけをしらない」「やきもちやき」というように、誇張を加え、カササギが男性としてのキツネの出現を警戒していることを読者に暗に伝えようとしているかのようだ。また、そういうカササギのことばを受けたイヌの台詞も「彼はそういうスタンスで生きていくことでつじつまがあっているんだ。そのままにしておけばいい」というような、キツネの生き方そのものを肯定した発言であったはずが「だいじょうぶ」、つまり自分たちの仲を脅かしはしないという意味での肯定にすり替えられている。

さて、いよいよストーリーが佳境に入り、イヌが眠っている隙を狙って、キツネがカササギを誘い出そうとする場面。ここにおいて、訳文におけるキツネとカササギの会話には、友情うんぬんというよりも、恋愛感情の揺れと受け取れることばのかけひきが展開される。
・まず、カササギを誘うキツネの次の台詞
“Leave Dog and come with me.”（原文）
「イヌなんかすてて、おれといっしょに行こうじゃないか」（寺岡訳）

「イヌなんかすてて」という明らかに恋敵を意識したくせのある言い方である。

・次に、原文と訳文とのあいだで、女性として、友をもって生きるひとりとして、カササギの造形が異なってくる重要な文章を考えてみる。
“I will never leave Dog. I am his missing eye and he is my wings.”（原文）

「イヌさんをおいては行けないよ。わたしはかれの目なんだし、かれはわたしの羽なんだもの」（寺岡訳）

She whispers back. “I am ready.”（原文）
カササギは、ついにこうつぶやいた。「いいよ、わかったよ」（寺岡訳）

キツネの誘いに対して原文では「私は行かない」ときっぱり自分の意志を表している。ところが、訳文では「イヌさんをおいては行けない」とあたかも、イヌに義理立てして自分の本来の気持ちを抑制していることを暗に示しているかのようだ。つまり（あの人さえいなければあなたのもとへ行けるのだけれど……）とでもいいたげで、すでに心がキツネの方に傾いているかのようである。また、この訳文に、思春期以降の女性読者の多くが読者が敏感に反応した。それは、「イヌさんをおいては行けないよ」という語り口の幼さは、それまでの自分とイヌとの関係をあどけないものに仮装してみせようとする恋愛のかけひきに外ならない、というようなかなり思い入れの強いものであった。寺岡がカササギに付与したこの文体に強く「女性性」とくに「恋愛場面における女性特有のかけひき」を嗅ぎ取ったものは、この場面を借りて、自分の恋愛観なり、恋愛体験を語り出しているようでもあった。

さて、三度にわたるキツネの巧妙な誘惑の末、ついにカササギがつぶやいた台詞について。原文では、控えめではあってもきっぱりとしたカササギの決意が表明されている。少し踏み込んだ言い方をすれば、裏切りをだれのせいともせず自分で引き受けるかのような潔さがある。しかしながら、訳文は「いいよ、わかったよ」、つまり（あなたの強引さに負けたわ）というような、裏切りの引き金がキツネにあることを軸にして、無意識のうちに自分の逃げ道をつくっているような印象がある。ここでも、思春期以降の女性読者の「やーだ、このカササギずるーい」とか「なんか、卑怯よねー、この女」というような、性意識を露にした反応が強く表れた。

・この後も原文とは少しずつニュアンスのことなる訳文が続くのであるが最後に問題としたいのは、ストーリーの最終場面、キツネに去られ、たったひとりぼっちで焼け野原に取り残されたカササギが、絶望の淵から、ある場所をめざして、再び歩きだすことを示す一文についてである。いったいカササギにとっての「ある場所」とはどこであったのか？
She begins the long journey home.（原文）
イヌのまつほら穴をめざして、ながい道のりの旅に出た。（寺岡訳）

カササギにとっての home とは、本当に「イヌのまつほら穴」だったのだろう

か。読者の中には、この一文でものがたりが閉じられた時「カササギは、絶対、イヌのところへは、たどりつかないよ。だって、彼女にとっての本当のやすらぎの場所は、もう、イヌのまつほら穴じゃなくなってるもん」「このカササギは、何度も何度も、自分の本当の居場所をさがて、手痛い失恋を繰り返し、自分を傷つけ、それでも、また、同じ過ちをくりかえしてるんだよ。だってほら、イヌに会う前も焼け野原で羽を痛めてしまってたじゃない」というような発言をした者が少なからずいた。彼らが感じとった「本当の居場所」こそ、カササギにとってのhomeではなかったか。そう考えると読者は、直感的に、訳文を超えて、ものがたりの深部へと主体的に入り込んでいったと捉えられる。

3，*FOX*と『キツネ』、ふたつのものがたり

原文と訳文を照らしあわせてみていく中で、ふたつのものがたりがみえてきた。

*FOX*は、イヌとカササギのあいだに結ばれていた絆が、カササギの心の中に芽生えた新しい世界への好奇心とそれをくすぐり出すようなキツネの孤独な存在によって、断ち切られてしまう。そこには、他者とのつながりを強く求めながらもひとところに安住できない、カササギのさまよえる魂の哀しさが存在する。カササギは自分を信頼しているイヌに対する裏切り行為を結局自らが選択し、その痛手も自らが背負うことになる。さまようカササギの魂が求めつづけるのは、ほんとうの意味でのhomeである。それが、イヌの待つ洞穴であるのか、全く違う場所であるのか、はたまた、そんな場所は幻想でしかなく、その幻想の場所を求めてカササギは、旅を続けるしかないのか、それは、明らかにされていない。

一方『キツネ』は、男と女の愛情のかけひきのものがたりである。カササギ（女）は、傷心の身をイヌ（男）によって救われるが、彼らのおだやかな生活は、孤独感を漂わせた一匹のキツネ（男）の登場によって破られる。カササギは、キツネの存在感に危険なものを感じながらも、その危うさに、次第に心ひかれていく。カササギは、そんな自分の心の揺れを気取られまいと表面ではふるまい、その反面、女としての自分をキツネに向かってひらいていく。結局、強引さに負けたというふりをしながら、自分を信じきって刺激の少なくなったイヌを捨ててキツネについていく。そして、つかの間の快楽の後、キツネに放り出される。放り出されて初めて、イヌの存在の大きさに気づき、カササギは、傷ついた体で彼の元へ帰って行く。

こうして較べてみると、原作*FOX*に登場するカササギの方が、間違った選択であろうとなかろうと、より主体的に、きっぱりと自らの道を進もうとしていることがわかる。寺岡訳によって造形されたカササギは、いつも受け身であることを装いながら、だれかに愛されようとする。そして、こうして造形されたカササギがある年齢層の読者を強く挑発したのである。

4，読みの諸相

ここまで、原作と翻訳の表現の違いがそれぞれどのようなものであるのかを具体的にみてきた。重要なのは、こうした作り手側の表現の違いが一冊の絵本の中でどのような世界の構築に向かうかが、読者の抱えもつ背景に大きく左右されるということである。もちろん、ここでいう背景には、個人的な生活史のみでなく、性差、年齢差ということも含まれる。ここは、一般の文学作品と異なる絵本の大きな特徴であろう。

筆者はこれまで何度か絵本に関わる読みが、読者の抱えもつ背景によって異なる事例をあげ、「絵本は、本の中だけで完結しない。読者の読みのまなざしを受けることによってようやく完結する[(3)]」と述べてきた。さて、今回の*FOX*と『キツネ』においてであるが、日常の読みあいの実践の中で、特に前述3，で確認した原作とニュアンスの異なる寺岡訳に率直に反応したのは、思春期以降の女性たちであった。経験的なところでいえば、学齢期の子どもたちには、そのような敏感な反応はみられないようであった。果たして、『キツネ』というものがたり世界の構築に、読者の性的成熟の過程は、実際どのように絡まっていくのか。このことを、改めて調査としての手続きを整えて確認したい。。こうした問題提起を掲げるからには当然二冊を読み比べなければならないが、実際に日本の子ども達、あるいは多くの日本の読者が目にするのは、日本語版『キツネ』のみである。そして、私が注目しているのも、日常の読みあい場面で、思春期の読者が、先に指摘したような、原文と異なったカササギの人物造形をしているところに集中してひっかかりをもち、そのひっかかりをもとに、自分の恋愛観や、傷ついた経験などを語り出したという事実についてである。今回、多数の読者に調査のかたちをとって確認しようとしたのは、性差や自身の生活体験の積み重ねによって、訳文がカササギに課したセクシュアリティーやジェンダーへの反応がどのように異なるのかということである。もしそこに何らかの共通した差異がみられるのならば、寺岡の訳文が提示した『キツネ』の世界は、性的成熟の過程にある特定年代の読者のまなざしと絡み合って初めて、新たなものがたりとしてつくりあげられるといえるのではないか。

＜調査＞

◎手続き

小学六年生36名（男16名，女20名）と大学生30名（男12名，女18名）それぞれと絵本『キツネ』を読みあい、以下の四点について、質問し、回答を得た。

質問1，カササギのことをどう感じましたか？

質問2，キツネのことをどう感じましたか？

質問3，イヌのことをどう感じましたか？
質問4，この作品と出会って考えたこと、いいたいことなど、何でも書いてください。

◎結果

質問1について……まず小学生男子の答えには、「ずるい」「わがまま」「いじわる」という否定的答えと「かわいそう」「さびしい」という同情的な答えが約半数ずつで、圧倒的多数を占めていた。「すなおじゃないけどイヌのことを考えてほら穴にもどろうとしたのはすごい」「イヌのことを思い、長い道のりを行くのですごいなぁ」という、ラストシーンでの行動を評価した答えが2名ほどあった。一方小学生女子の回答は、男子のようにカササギのことを端的に「いい」「わるい」と評価できず「イヌを裏切ったのは悪いが、最後にイヌのところへもどったのはいい」というような答え方をした者が8名いた。この答えも含め、ラストシーンを評価している者が１２名もいた。一方「勝手。後で後悔してもだめだ。早く気づけばよかったのに」「自分のことしか考えていなくてイヌのことを信じていなかったのだからしようがない」と手厳しく否定していたものが2名。また「イヌと仲良くなったけど、それは飛べない自分の悲しみを一番身近なところで解決しようとしていただけ。」と鋭い分析をしてみせる子もいた。

これに対し、大学生の回答であるが、男子学生の場合「こういう女はいやだ」「よくあるタイプ」「なんだかいやだ」「イヌを裏切ってゆるせん」というような、女性に見立てたうえでの漠然とした嫌悪と、裏切り行為に対する批判が主流を占めていた。小学生の男子にみられたような同情的な意見はみられなかった。一方、大学生女子の答えの中では、多様な意見がみられた。「何度でも恋愛で同じような失敗をするタイプだ」「こんなふうにぼろぼろにならないと、人を愛せないんだと思う。素のままの自分では、人に愛される自信がない」「なんか、自分を見ているみたいで、いやだ」「女のずるい部分がみえみえでいやだ」「自意識過剰っていうか、こういう女はむかつく」「結局キツネにも捨てられて、罰があたったって感じもするけど、こりないんだよなぁ、きっと」「イヌもキツネも見た目が同じようなタイプ。この女は似たようなルックスにひっかかる」といった具合にである。いずれにしても、カササギを「女」としてみて、どう捉えるかを自分に引き寄せてそれぞれの思いで語っているものが圧倒的に多かった。これは、この調査に入る前の、日常の読みあい場面とも共通するもので、寺岡の、カササギに「女性性」を付与した過剰な訳文と深い関係があると思われる。

質問2について……小学生の男子は「ひどい」「せこい」「わるいやつ」「いやみ」といった否定的な感想が10名。残りの6名が「さみしかったのでは」「ひとりぼっちでかわいそう」「さびしくてしょうがなかったのでうらやましくなったのだろう」

という同情的な意見だった。これに対し、小学生の女子は、やはりカササギに対する感想の時と同じで男子よりは、複雑な感情を表現していた。「自分がずっと一人だからくやしくなって言ったんじゃないか。だから少しかわいそう。でも冷たい」「ひとりぼっちのさみしいキツネ。イヌとはちがう意味でかわいそう。イヌやカササギをひとりぼっちにしようと考えるなんてよっぽどさみしいんだな。イケないことをしているけれど、別に悪くない」「少しいじわるで悲しくもある。ひとりぼっちでさみしかったんだろう。これが怒りに変わり、自分が味わったつらさを感じてほしかったんだろう」「はじめはイヌやカササギをひとりぼっちにして意地の悪いキツネと思ったけど、最後にカササギを帰らせる気にしたのはスゴイ」このように、行動の奥に潜むキツネの孤独を掬いとろうとする心の動きが多く見られた。さて、小学生と異なり、男子大学生にも女子大学生にもキツネについての否定的な意見は、ほとんどみられなかったのが、ひとつの特徴であった。「かっこいい」とか「大人の男としてちょっと憧れる」「これは、しかたない。こいつは、結局他人とは暮らせないんだから」というような、男子大学生の意見。女子大学生には「イケナイことだけど、意外とこういう男にひっかかってしまうのかも」「こういうアブナさ、けっこうひかれる」「キツネも一瞬は本気でカササギを愛したのだと思う」「キツネはわるくない。キツネはだれかを愛していっしょに暮らしても相手を食い殺してしまう宿命をもっているのだから」というように、その生き方を真っ向から捉えようとしているものもあった。こうしたキツネの中に男性性を見いだした強い反応はやはり、寺岡の過剰な訳文に刺激されたところが大きいと思われる。もちろん中には「必ずこういうふうにまぜっかえしておいて、さっと手をひいちゃうのがいる」というように、非難したものもあったが、ごく少数だった。

質問3について……小学生の回答には、男子と女子の違いがほとんどみられなかった。「目が悪くてかわいそう」という同情的な意見と「すごくやさしい」という肯定的な意見がほとんどであった。少し違った見方としては、女子の中にひとり「のーてんきだけど、カササギもキツネも大事な仲間だと思っていてやさしい」という意見があったことぐらいである。ところが大学生になると、男子は「べつにどうってことも感じない」というような意見に混じって「イヌのさびしさは、いたいほどわかる。こいつがいちばん孤独だ」とか「眠ったふりをし続けるのも結構つらいはずだ」「イヌには女のこころがわりを認める勇気がなかった」というような自分の男性性に引き寄せた反応もみられた。これに対し、大学生の女子のイヌに対する感想には、これといった強い感情の引き寄せは多くはみられなかった。ただし「イヌが悪い。女は愛されてるっていう実感がいつもほしいんだから、あんな風に安心しきって、のんびり寝ていてほしくはなかった。」というように、女性の求める男性のありように照らして批判しているものがあった。

質問4について……全体の感想となると、小学生の場合、男子も女子も共通するものが多かった。ひとつは、なにがしかの教訓をものがたりから読み取ろうとする姿勢が見られるということ。「人はひとりぼっちにされるのがいやなんだということが、よーくわかった。ひとりぼっちにさせたらいけないなぁと思った」「気持ちを考えた方がいいと思った」「人のできないことをしてあげたりして助け合うのはいいことだと思った」「もっと友達を大切にしないといけないな」「人にやさしくして思いやりをもっていきたい」「ひとりぼっちのきもちを考えなくてはならないということを学んだ」「最初に出会った友だとは大事にしないといけないな。自分のことを一番思ってくれる人を裏切ってはいけない」というように。これは、よくも悪くも読後に反省を踏まえた前向きな展望を要求する学校読書教育の影響であろうか。また、自分の日常場面に置き換えた感想もここでは男子2名、女子2名に見受けられた。「カササギのしたことは、まるでおじさんに誘われてついていって何かされたみたいだ。ぼくはそんなことをいわれても絶対ついていかない」(六年生男),「人間でもこういうことってあると思う。どうしたらいいのかな」(六年生男),「やっぱり三人ってむずかしい。一人になったときの気持ち、私はとってもよくわかる」(六年生女),「自分の友達関係みたいだ」(六年生女)。これに対して大学生の意見は、やはり多様で、結論を良しとも悪しとも判断できず、回答者自身が考えこんでしまうものが多かった。特に女子の大学生には、カササギに同化して心彷徨うものがみられた。「カササギは結局のところ、キツネの所へは戻れないと思う。万一戻れたとしても、もう前のようには暮らせないと思う。」「戻って行く途中で案外またちゃっかり他の男に拾われるんじゃないか。」「こういうタイプの女は、結局、ずうっと愛を求めてさまよい続けるんだと思う。イヌのところに戻ってもまた、出て行くと思う。」「ばっかだなぁと思うけど、こういう女に、男って弱いのよね。まあ、カササギは意図的にそうしてるわけじゃないと思うけど。こういうタイプの女って絶対いる。」「腹立つけど、戻って来たらイヌは、やっぱりカササギのこと許しちゃうんだろうなぁ。」などなど。

小学生の答えが、テキストにそって、イヌの待つ洞穴へ戻ることを前提としていたのに対して、大学生は、果たしてカササギにとって帰り着く場所はそこなのか？イヌの待つ場所なのか？という疑問から出発しているものがほとんどであったことが興味深い。

ラストシーンにおいて当然、小学生の読みには、「よかった」という安堵感と同時に、作品としての完結感があるわけだが、めざす場所を見定められない不安定さをカササギとともに共有しようとする大学生の読みには、作品としての完結感はない。その不完全さが、読者の中に内在するものがたりの扉を開けさせ、それぞれにとっての『キツネ』のものがたりをつくりだそうとする原動力になっているのではないか。

5，考察

訳文が原文と離れて別の方向性を持とうとしているという事実は、訳者のジェンダー意識を問う形で非難していくことも、可能ではある。しかし、私は、絵本は、テキストだけでは完結しない。読者のまなざしと絡まることによって、初めてひとつの作品として作り上げられていくと考えている。『キツネ』の場合、寺岡が差し出したカササギの「女性」としての造形に、性的成熟を果たそうとしている読者のジェンダー意識がかぶさった時、ものがたりが別の扉を開けて進み始めた、といえるのではないか。調査結果にみられるように、日常的に性的な葛藤や駆け引きを経験していない小学生にとっては、寺岡の訳文によっても、ほぼ原文に近い「友情と裏切りの物語」として捉えられていた。しかしながら、カササギが最終的に行き着こうとする、ほんとうに求めていた場所、つまり原文のラストにあるキーワード home に近づく解釈は、小学生には無理であった。それゆえ訳文に忠実に「キツネさんは、イヌさんのところへ戻った＝イヌさんと仲直りした」という解釈にとどまった。また、小学生、とくに高学年の読者には、最終的に、ものがたりから肯定的な主題あるいは教訓性を読み取ろうとする読みの方向性が備わっている場合が多く、それに引きずられた感想が多かったことも一つの発見であった。一方大学生は、女性の場合は多くカササギの中に、また男性の場合はキツネやイヌに自分と共通の性を見いだし、そこに深く反応した。特に女性には、カササギの姿を借りて自分の恋愛観や体験を語り出す傾向が非常に強かった。また、彼らは、小学生とは逆に、自分が作品の中へのめり込むことで、カササギにとって必要な自分の居場所＝home を敏感に嗅ぎ取り、「イヌのまつほら穴めざして」という訳文の向こう側へと読みを進めていった。このことを、訳文の挑発によって、読者が絵本の主体的な読みを獲得したひとつの例として、私は積極的に捉えたい。

今回の調査にはふたつの大きな意図があった。ひとつは、絵本の場合、最終的なものがたり世界の構築には読者の読みの背景が不可欠な要素になるということを確認すること。もうひとつは、子どもの絵本読みと大人の絵本読みにおける、ものがたり世界構築の手順の違いを明らかにするということであった。学齢期の子どもたちは、一場面ずつを楽しみ、一見断片的な読みが主流であるようにみえながらも、ページを読み進めていくうちに、その細部の楽しみを削ぎ落とし、粗筋のみをひきだそうとする、一本化の道筋をたどるのではないか。それゆえ、訳文の繊細なニュアンスは、一場面ずつの中では、影響を受けることがあっても、筋をたどろうとする読みの流れの中で抹殺され、最終的には本筋ともいえる「友情と裏切り、そして反省、和解へ」の構図だけが残ったのではないか。それは、小学校でも高学年に至るほどはっきりしてくる。『キツネ』においては、低学年にはその内容が、やや難解で、アンケートの形での回答を得ることは難しかった。

しかしながら、一対一の読みあいの中では、『キツネこわい』とか『カササギさんかわいそう』という断片的な反応が大半を占めていた。これに対し大人は、通常は粗筋を引き出そうとする一本化の読みを踏襲するが、ひとたび自分の生活背景に触れる場面や登場人物に出会うと、その場面に強く反応し、断片的な場面場面の解釈をつなげた全体像をつくりあげようとする。本作品の場合は、寺岡の性意識を挑発する過剰な訳文がその引き金となったといえよう。この両極端な大人の反応は、「それで、一体この絵本は何が言いたいわけ？」というようにすぐさまあらすじや主題を確かめたがる反応と「そういえばあたしも昔はねぇー……」などと、細部の表現との出会いから、自分の抱えている問題を一気に語り出していくという、両極の反応が、しばしば大人たちとの読みあいの場面であらわれることと一致している。

筆者はこれまで、絵本のもつものがたりと、読み手が日常の中で育てているものがたりが、どのように共鳴するのかを実践を通して考えてきた。人は一冊の本を読んでいるとその中に、その人独自の「別の扉」がみえてくることがある。それは単なる絵本テキストの延長としてのエピソード的な会話とか、あるいは文脈に沿った掛け声や歌をうたう、といったことではない。ある意味で読み手の意思や「気づき」「感想」といったものを越えたところから生まれて来るものである。そして、読者が絵本の何とコミュニケーションするのかと問われれば、それは、主題ではなく、その「扉」を開けてみえてきたものとの対話であろう。その「扉」の奥で交わされる対話そのものがひとりずつひとつずつの「新しいものがたり世界構築」であるとかんがえているのだ。[(4)] それゆえ、ひとつずつの絵本テキストについて、ひとりずつの読者について「扉」となるものが存在し得たか、その際の「扉」となったものが何であるのかを、丹念に追っていきたいと思う。少なくとも寺岡の訳文は、思春期を越えた読者のうちの何人かにとって「扉」となりえたようだ。そのことを、訳文の妥当性という従来の尺度とは別のところで、捉えてみることが、絵本研究に求められるのではないか。

註

（1）Margaret Wild & Ron Brooks, *FOX*, Allen & Unwin Pty Ltd., 2000

（2）マーガレット・ワイルド文、ロン・ブルックス絵、寺岡襄訳、『キツネ』BL出版、2001

（3）村中李衣『読書療法から読みあいへ』教育出版、1998他

（4）絵本のもつ「扉」については、何度か発言を繰り返してきたが、読者と絵本の間のコミュニケーションの問題として発言したのは、2002年度第5回絵本学会大会（2002,6,30）であり、この内容については、「絵本学会NEWS NO.16」に佐々木宏子氏が要約している。